

## 留学生への日本語指導と日本語教員課程

国際関係学科 宮谷 敦美

本報告では、2012 年度の外国語科目としての「日本語」の開講状況と、日本語教員課程の教員養成における教育実践と共に、2013 年度から本格的に開始する交換留学生を対象とした日本語プログラムと日本語教員課程との教育連携の方向性について述べる。

### 1. 2012 年度の外国語科目「日本語」について

外国語科目の「日本語」は、主として学部留学生を対象とするものと、特別聴講学生(以下、交換留学生)を対象とするものに分類される。2012年度は、学部対象科目は通年5コマ、交換留学生対象科目は通年6コマ、半期1コマを開講した。概要は、以下の表1のとおりである。

[表1 2012 年度留学生対象日本語科目一覧]

科目名	開講	対象	レベル	担当者	内容
日本語Ⅰa	月1限	学部1年	上級	石川美紀子※	アカデミックライティング
日本語Ⅰa	木2限	学部1年	上級	中道一世※	口頭表現技術
日本語Ⅱa	月2限	学部2年	上級	石川美紀子※	アカデミックライティング
日本語Ⅱa	木1限	学部2年	上級	中道一世※	口頭表現技術
日本語Ⅲa	木3限	学部3年	上級	黒野敦子※	読解、論文作成
日本語Ⅰb	月4限	交換	初～中級	山口和代※	語彙、文法
日本語Ⅰc	火3限	交換	中～中上級	加藤淳※	論文作成基礎
日本語Ⅱb	木2限	交換	初～中級	米勢治子※	プロジェクトワーク
日本語Ⅱc	月2限	交換	中～中上級	馬場典子※	読解
日本語Ⅲb	火5限	交換	初～中級	加藤淳※	文法、4技能統合
日本語Ⅲc	火4限	交換	中～中上級	横内美保子※	プロジェクトワーク
日本語Ⅲc (前期)	水1限	交換	初中級～ 中上級	宮谷敦美	機能会話、討論

※印は非常勤講師

学部対象科目は、大学での学修に必要なレポート作成、発表・討論技術の養成を目的としたものが中心である。アカデミックな場面における日本語表現と共に、調査に基づいた発表やレポート作成など、情報リテラシーに関する内容や、作文のピアリーディングなど、論理的思考の訓練も行っている。

交換留学生対象科目は、日本語運用能力によるレベル設定をし(初級から中上級)、4技能を一通り学べるように授業科目を設定している。現段階では、交換留学生を対象とした日本語科目は十分に開講できていると言える状況ではないが、日本語レベルが日本語能力検定 N2

相当以上の学生には、学部対象科目の履修も勧め、交換留学生全員が少なくとも週 4 コマ以上の日本語科目を受講できるようにしている。交換留学生対象クラスは、日本語の基礎力の強化とともに、プロジェクトワークや日本人学生とのディスカッションを取り入れたクラスなど、学生間のコミュニケーションを中心とした相互理解と、学生自身が授業を創り出すことを目的とした教室活動が特徴である。また本年度は日本人学生に希望者を募り、ディスカッションする教育実践を行った(2.で後述する)。

日本語および交換留学生対象の全科目(「日本の文化(前期)」、「日本の社会(後期)」)は、授業担当教員と日本語教員課程担当教員と国際交流室桑村教員の計 11 名がメールを利用して授業記録を共有している。このシステムはすでに 10 年以上続いており、留学生の日本語の学習状況だけでなく、彼らの生活状況(長期欠席していないか、問題を抱えていないかなど)を把握する一助となっている。2011 年度より、このメールシステムに国際交流室が加わったことにより、教育現場から教務・生活指導担当部署との情報共有がスムーズになることを期待している。

2012 年度、日本語科目を履修した留学生は、学部留学生が 1 年生 9 名、2 年生 6 名、3 年生 3 名、交換留学生は前期が 10 名(フランス 2、ドイツ 2、韓国 5、ブラジル 1)、後期が 10 名(フランス 2、ドイツ 3、韓国 4、ブラジル 1)である。このほかにも、日本語能力の強化が必要であると判断された数名の研究生が聴講している。ほとんどの研究生は大学院進学を目指しており、本来、日本語能力は学部留学生相当であることが望ましいが、実際は、学部日本語科目を聴講できるレベルに達していない場合も多くあり、交換留学生向け科目を履修することもある。しかしながら、交換留学生対象の科目は必ずしもアカデミックジャパニーズの習得を目的としたものではないため、ニーズの不一致が起き、現場の教員が個々に対応するなど、科目外の負担が大きくなっている。外国人留学生を研究生として受け入れる際にどのような指導が必要となるのか、また学修に必要な日本語能力を有しているかを確認する方法など、研究生受け入れに関する教員へのガイダンス、情報周知の方法について議論する必要がある。

なお、本学の交換留学生数は、2012 年度秋に外国語学部が「文部科学省グローバル人材育成推進事業」に採択されたことにより、2013 年度以降大幅に増加することが見込まれている。これに伴い、交換留学生向けプログラムを充実させることと、4~8 週間程度の短期留学プログラムを整備することが決定された。

2011 年度の「外国語科目『日本語』と日本語教員課程」(東弘子執筆、『ことばの世界』第 4 号)も、今後増加する交換留学生の履修指導について、国際交流室を中心とした指導体制づくりが急務であると指摘している。来年度からの交換留学生向けコースの拡充や研究生の指導の現状を考えると、受け入れから履修指導までの一連の流れをスムーズにしていけることが喫緊の課題である。

## 2. 日本語教員課程での試みー相互学習の可能性ー

2011 年度に実施された短期集中日本語講座では、本学の日本語教員課程を履修している学生を中心に、アシスタントとしてクラスに参加させるという試みを行った(「ガジャマダ大学『国際大学交流セミナー』実践報告ー短期研修コースにおける日本語講義ー」加藤淳・東弘子執筆、『ことばの世界』第 4 号、参照)。この実践は、留学生には、同じ年代の「普通の大学生」と接し生の日本語に触れる機会になっただけでなく、本学の学生にとっても、言語を調整して話

す訓練の機会を得るとともに、国際理解を深める貴重な経験となった。

本学の日本語教員課程は、現在、主として外国人集住地域のNPOが運営する日本語教室を中心に日本語教育実習を行っており、多文化共生意識の醸成や、生活者としての外国人の支援について理解を深めることを主目的としている。今後、日本語教員課程では、地域での実習に加えて、学内の留学生や海外の協定大学で日本語や日本学を学ぶ学生との交流を深める教育内容を加えていくことを計画している。このことによって、異文化対応能力の育成や異文化コミュニケーション能力も向上させることが期待される。

以下、日本語教員課程が「グローバルな視野をもち、グローバルにも対応できる日本語支援者」を養成する教育カリキュラムを企画・検討するテスト事例となった「愛知県立大学・ガジヤマダ大学 教育・学術相互交流プログラム」における日本語実習について紹介する。

このプログラムは「平成24年度愛知県立大学理事長特別教育・研究費」の助成を受けたものである。日本語教育実習を履修済みまたは履修中の本学の学生9名(学部生8名、大学院生1名)が、9月3日から14日にかけて、インドネシア・ガジヤマダ大学で、日本語学科の学生を対象に日本語教育実習を実施した。6月下旬から8月にかけて、教案作成や日本文化紹介プロジェクト準備など留学前指導を行い(14コマ相当)、現地では、初級クラスの授業サポート7コマ(1コマ90分)、初中級～中級クラスでの教育実習6コマ、日本文化紹介実習2コマ、そのほかキャンパスツアーなどの交流授業を実施した。この実践をとおして、学生は多人数クラス運営の体験と共に、海外の留学生が日本をどのように認知しているのか、また何を知りたいと思っているのか、さらには日本紹介プロジェクトをとおして、日本人として日本に関する知識を深める必要があることを、肌で理解することができた。受け入れ大学であるガジヤマダ大学からも、日本語学科の学生が日本語でのリアルなコミュニケーションを体験できたことや、日本文化の理解につながったこと、さらに学生の日本語学習の動機が高まったことなど、高い評価を受けている。本実践で海外での教育実習の効果を確認し、2013年度は「日本語教育実習(海外)」という科目を立ち上げることとなった。

また、交換留学生対象の科目「日本語Ⅲc」(2012年度前期、宮谷担当)で、日本語教員課程を履修中の学生から希望者を募り、留学生と討論する教育実践を行った。このクラスでは、機能シラバスによる会話練習を中心に進めた。毎回、ある言語行動場面をとりあげ、ロールプレイを行った後、どのようなストラテジーを用いると円滑に、かつ戦略的に会話を進めることができるか、留学生と日本人学生が共にディスカッションを行うというものである。これにより、留学生はいわゆる「正しい日本語」だけでなく「場面や相手に応じて『普通の』日本人の大学生がどのような言語行動をとっているか」について知ることができ、日本人学生は、普段自分が気づいていなかった言語行動規範を内省し、「日本語の言語行動の特徴」について考察することができた。また、それぞれの留学生の日本語能力にあわせて、日本語を調整して話す練習や、日本語教師の説明のしかたを見学する機会にもなった。

これらの教育実践を基に、来年度の日本語教育実習から、4～8週間程度の短期留学プログラムや交換留学生向けクラスで、留学生と共に学ぶ形式の授業体験を取り入れる予定である。2013年度は、まず7月から8月にかけて実施されるシベリア連邦大学夏季日本語集中講座で相互交流型授業を実施し、その効果を検証する予定にしている。この内容については、来年度の報告で述べたい。